令和 6 年能登半島地震への医療救護第二班援活動

呼吸器内科　黄　文禧

救護班第 2 班
活動期間:2024 年 1 月 7 日(日)～11 日(木)
活動場所:石川県輪島市

2024 年 1 月 1 日 16 時 10 分、石川県能登地方を震源とする最大震度 7 の地震が発生した。ここに記載するまでもないが、甚大な被害状況が明らかとなっていった。
当院からは、1 月 2 日から災害コーディネーター班が石川県へ派遣され、翌 3 日には医療救護班第 1 班が派遣された。3 日午後、救護活動参加の指示があり、7 日から救護班第 2 班としての派遣が決定された。

第 2 班は医師 1 名、看護師 3 名、薬剤師 1 名、主事(ロジステック担当)6 名の当院職員と日本赤十字社大阪府支部職員からなる計 10 名で構成された。同じ院内で働いてはいるものの初めて顔を合わせる職員もおり、また災害救援活動についての講習は受講していても実働として派遣されるのは今回が初めてとなる職員もいた。派遣前日に第 2 班全員が集まり、発災現場の現状や第 1 班の活動状況、第 2 班の活動予定などの説明を受けた。有意義な救援活動を継続するためには、事故なく安全に活動を終えることが重要であることを皆で確認し、翌日 9 時に必要な資機材を 3 台の車に載せ、病院を出発した。

1 月 7 日は金沢までの移動と日本赤十字社石川県支部にて災害コーディネーターより現地での活動内容について指示を受ける予定であった。発災から 1 週間が経過していたが、被災地の状況、被災地までの道路状況は依然として不明な部分も多く、刻一刻と変化し、派遣された私達自身がどこでどのような活動が可能なのかすぐに指示が出ず、様々な医療救護班が介入している中、日赤救護班の役割を決めていき、現場活動の支援する災害コーディネーター班の皆さんが如何に大変な業務を担ってくれているのかを直に感じた。混乱している中、第 2 班の活動は第 1 班と同じ輪島での活動と決まり、翌日早朝に輪島へ出発することが決まった。輪島への道中は自由に買い物などもできなくなる

ことから、救護班全員で食料調達なども含め金沢市内の大型スーパーで買い出し中に、赤十字マークの入ったユニフォームで行動していた私達に対し、金沢市民の方々から被災地での活動に対するねぎらいの言葉などを頂き、医療救護班としての責任に身の引き締まる思いであった。

1 月 8 日、朝 6 時にホテルを出発し、輪島へ向かった。輪島に近づくにつれ、道路のひび割れや陥没、遠くに見える斜面の土砂崩れなど、地震の大きさが明らかなとなり、その風景が続いた。12 時過ぎた頃に、輪島市内の救援活動の拠点となっていた輪島市立病院に到着、赤十字の災害コーディネーター班より、輪島市内の避難所の状況等の説明があり、1 月 2 日以降アセスメントがされていない輪島消防署内の避難所での再アセスメントと巡回診療を行うよう指示を受け、活動を開始した。輪島消防署は公的な避難所ではなく、消防署内の職員や他府県から消防職員が活動されているところで、会議室や休憩室などに 100 人以上の被災者が集まり、生活されている状態であった。ここでの取りまとめ役となっていた女性(市役所職員)に避難所の現状と診療が必要な人の有無について聞き取りを行った。元々土足で使用されていたところであったことから、どの部屋も土足のまま、地べたに毛布などを敷いたところに被災者が密集している状況であったこと、断水の影響により手洗いなどが不十分であることなど衛生面で改善すべき課題があった。また訪問時にはどの避難所でもインフルエンザやコロナ感染症や下痢・嘔吐などの感染性腸炎が広がり始め、限られた物資と時間の中で少しでも状況が酷くならないように急ぎ対応を考える必要があった。診療については発熱で体調を崩されている方と全介助の胃ろう栄養中の高齢男性等数人の診察を行い、必要な治療等をおこなった。発災から 1 週間が経過し、被災者の疲弊されている姿を目の当たりにし、私達に何ができるのかと考えながら、明日以降の活動について、他日赤救護班とのミーティングを行い、活動記録などを整理し 1 日が終了した。

1 月 9 日(輪島 2 日目)は、避難所となっている輪島消防署と輪島高校のアセスメントと巡回診療を行った。午前中は、消防署内に簡易の診療所を作り、署内の被災者に診療することをアナウンスした。事前の情報では診療希望者は数人とのことであったが、実際には 20 人以上の人が集ま

り、全員で手分けして診療をおこなった。ほとんど方は軽症であったが、血圧などの測定や問診、聴診をし、大丈夫ですよとお話するだけで安堵される被災者の皆さんと接し、被災者の皆さんが如何に我慢されて避難生活をされているのかを感じ、こういう活動ができるのは日赤救護班強みであり、継続していく必要性を感じた。午後は消防署内の環境整備を行うチーム、輪島高校の巡回診療をするチームに分かれ活動した。輪島高校は公的避難所で、400 人を超える被災者が教室や体育館などに分散し生活されていた。ここでは発熱患者や下痢・嘔吐患者を隔離対応し、そこを他府県から派遣された看護師が管理していた。また生活の場は土足禁止になっており、比較的環境整備が進んでいた。まずは体調不良者の把握方法や隔離対応中の被災者の状態、隔離スペースの管理を担っている看護師に日赤救護班への要望などをうかがった。ここでの活動中の夕方頃、午前中まで元気だった 80 代女性被災者が発熱し、ぐったりしていると診療依頼がきた。すぐに駆け診察したところ、39℃の発熱、呼吸状態が悪化しており、入院加療が必要な状態と判断、日赤災害コーディネーターに相談し、同時期に活動していた舞鶴赤十字病院救護班の協力のもと輪島市立病院に救急搬送した。この頃、災害関連死について報道されていたが、このような事例が適切な対応がされなかった場合に重篤なことになる可能性があり、そのような状態になる前に早期に適切な対応をすることが救護班の重要な役割であると痛感した。

輪島での活動の最終日となる 1 月 10 日午前は、前日と同じく 2 チームに分かれ、輪島消防署の環境整備と診療が必要な人の洗い出しと輪島高校の巡回診療を行った。輪島消防署内の生活の場の土足禁止化などの衛生環境の一部改善のめどがたったが、下痢・発熱患者が増えつつあった。巡回診療終了後、活動記録の整理、次の日赤救護班への引き継ぎなどを行い、輪島での活動を終えた。

今回の活動の中で、発災初期の混乱の中、正確な情報収集をし適切な活動につなげる災害コーディネーターの大変さ、実際の被災現場での活動では指示通りにことが運ばないことが多く、柔軟に対応する必要があること、被災者は自身の優先順位が低く我慢されており、私達救護班がそこに寄り添い、大事に至らないように対応することが重要であることなど色々気づくことができた。

最後に、発災から 2 ヶ月が経過した現在も多くの被災者が避難生活を余儀なくされていることを忘れず、1 日も早い復旧復興を祈願し、微力ではありますが、今後も被災者の方々の支援に携わっていきたいと思います。